

カンフル剤になるのか？

住宅リフォーム助成事業、上限5万円では経済波及効果に疑問

6月21日の市議会本会議一般質問で、私は今年が目玉事業である住宅リフォーム助成への、市民の応募が低調なことについてただしました。募集期限の5月末になっても、予算3000万円・600件の予定に対して、市民からの申し込みは760万円・169件、わずか25%しかありませんでした。

お隣の亀山市は予算1000万円を超過し、1170万円・92件、桑名市では申し込み初日に1日でオーバーしたとのこと。どこの自治体でも申し込みが殺到するのに、なぜ鈴鹿市だけが不評なのか？それは他市では助成の上限が10万円～20万円なのに、鈴鹿市は5万円と低いことが要因です。

瀕死の病人に「漢方薬」を処方しているような

担当部長は「広く浅く平等に補助金が行き渡るように配慮することが、本市の特色」と答え、「7月から2次募集を行ない、先着順に3000万円に達するまで受け付ける」とも答えました。

私は「そもそもこの助成制度は『緊急経済対策』として、不況でどん底の中小建築業に仕事が回るようにするための『カンフル剤』にすることではなかったのか。『助成金があるならリフォームを頼もうか』と市民の需要を掘り起こす効果が大事なのに、これでは瀕死の病人に『漢方薬』を処方しているようなものだ。」と引き上げを求めました。

市側の答弁は、このままで2次募集を進めるとのことでしたが、私は「漢方薬なら、長く続ければ徐々に効果が出てくるが、この事業は1年ポッキリでおしまいだ。これでは助成効果があったと検証できても、次の手を打つことにつながらない。来年度も続けるべきだ。」と継続を求めました。

もう「同和行政」は役目を終えた

鈴鹿市の同和对策事業は1970年代から進められ、最後の「地域改善対策法」が失効した2002年までにすべて終了しました。それからさらに10年が経過しましたが、いまだに市庁舎前に「部落差別をなくそう」という大看板が立ったままです。私は6月21日の一般質問で、鈴鹿市は「同和行政の終了宣言」をして、看板を撤去することを求めました。

担当部長は「事業としてはすべて終了しているが、依然として『差別意識』の問題が残っており、啓発を続けていく」と答えました。「具体的に、どんな問題がこの10年間にあったのか」と聞くと、年に2～3件ほど「差別事象」があると言います。私は「広報すずかで毎月連載している『広げよう人権尊重の輪』という記事を何年もさかのぼって見たが、外国人とか男女とか障害者とかの記事ばかりで、同和問題はゼロである。つまり何も問題がなかったということである。」「20万市民の中に、何人かは偏見や差別意識に凝り固まった人もいるだろうが、これまで40年、行政と市民が努力をしてきた到達点をこそ、市民に啓発すべきだ」と、重ねて終了宣言を求めました。

核兵器も原発もなくそうと平和行進



津市役所前を歩く行進団

原水爆禁止を求めて広島まで歩く「国民平和行進」が、今年も6月13～14日に鈴鹿を通りました。私は14日の白子から河芸を経由して津まで参加し、まる1日歩きました。

昨年の福島原発事故の後からは、核兵器とともに放射能をまき散らす危険な原発をなくそうという意識で参加する市民が増え、平和運動に厚みと広がりが出てきました。

J A 鈴鹿総代会議長をつとめました

6月23日、鈴鹿農協5階ホールで「第26回通常総代会」が開かれ、私が組合長から「議長」を依頼され、当日の議事を進めました。かつては自民党の応援団だった農協が、れっきとした共産党議員の私を最高決定機関の議長に推すのに抵抗がなくなった、ということに時代の変化を実感しました。

J R 加佐登駅が10月から無人駅に

J R東海は、本年10月1日より、加佐登駅を「駅員が終日にわたり常駐しない駅（いわゆる無人駅）」とすることを市に通告してきました。加佐登駅は現在、夜間を除き1人勤務体制ですが、10月からは誰もいなくなります。いまある券売機もなくなって、運賃は降りる駅か車内で精算することになります。定期券は四日市駅か亀山駅まで行かないと買えなくなります。

私が駅を利用するのは、出張の時や旅行ぐらいですが、名古屋へ出るのに近鉄と比べて便利で、とくに名古屋駅のホームが新幹線の隣というのが気に入っています。これからは特急券なども買えなくなって、不便になります。また、高校生などが多く利用する駅なので、治安が悪くならないかも心配されます。

わが鈴鹿市は「ヘソのない」街？

7月2日の市議会全員協議会で、末松市長は「都市イメージキャッチコピー」の作成を提案してきました。説明によると、本市には「サーキットのまち」「自動車産業のまち」といった都市イメージはあるが、それ以外の地域資源やまちの魅力を十分に発信できていない。そこで、「杜の都・仙台」のように市全体で一体感をもつ地域ブランドを作ろうという趣旨だとのこと。

議員からは「わざわざ検討委員会など作らなくても職員で出来るのでは」などいろいろな意見が出ました。私も次のような発言をしました。「鈴鹿市のような『ヘソのない街』を、ムリに1個だけのキャッチコピーで表わすことは出来ないのでは。4～5種類作ってその場に合うものを使っては。」

会議後に何人かの議員から、「石田さんの言う『ヘソのない街』が、鈴鹿にピッタリだ。それがいい。」と賛同の声が。しかし、このコピーで全国発信は、ちょっとムリでしょう？

映画「エクレール・お菓子放浪記」

いよいよ鈴鹿で上映されます。チケットは一般1000円です。

とき・8月1日～3日 各3回（10時・13時・15時30分・3日のみ18時）

ところ・鈴鹿市文化会館けやきホール

チケットご希望の方は、ご連絡ください。

ずいそう



不破さん夫人の一代記

上田七加子著「道ひとすじ・不破哲三とともに生きる」が評判である。雑誌に連載していた原題「夫・不破哲三との革命的熱愛人生」の方が、中身をよく表していると思うほど、山あり谷ありの人生、それも共産党最高責任者の夫人という特別な経験をもつ一女性の一代記である。しかしその実像は、気さくな下町のおばさん、その亭主は金儲けや出世に関心のない勉強好きのおじさんという、近所に住んでいそいな庶民である。

私が日本共産党を知った時には、不破さんはもう書記局長であり雲の上の人のように思っていたので、この本で若いころの不破さんと七加子さんの生活ぶりやエピソードを読むと「目からウロコ」である。戦後初期の学生運動や労働組合書記の仕事、狭いアパート暮らし、団地の自治会やPTAの活動を通じて、労働者の楽天性、下町の助け合い、人情を大切にしながら政治に関わっていく道すじは、私たちとあまり変わらない。どこが違うかというと、庶民性と併せて、国際的に通じる高い理論水準や文化的な水準も身に付けているところで、これは逆立ちしても真似できない。

いつも「自然体」で支え合った2人3脚の人生

私は一度だけ七加子夫人にお目にかかったことがある。1999年4月3日の白子駅前街頭演説会に、不破委員長を迎えた時である。不破さんは87年に心臓病になったことから、選挙中の遊説には体調管理も兼ねて夫人が同行していると聞いた。車から先に降りて、司会役の私や関係者とテキパキ打ち合わせをして、車中の委員長に取り次いでいた。しっかりした奥様だなあと感心したことをおぼえている。

ところが、この本を読み進むと、七加子夫人は98年に胃がんの手術、その後モリウマチや股関節の病気が続き、「2000年ごろからはベッドから数歩のトイレに行くのさえ大変」になったと書いてある。鈴鹿に来たころは自分の体も大変な時期だったのだろう、そういえば杖をついていたような記憶がある。このように夫妻は2人3脚でお互いに励ましあい、労わりあいながらその重責を果たしてきたのであるが、いつも「自然体」で楽しく過ごしてきたと、60年余歩いてきた道をふり返っているのである。